

西、神經

<212>

戦没一万八十五柱の靈にせんべい
に捧げ、かわきを拂ひせんべい。
この御法がゆるい御法なり。

包囲され、逃げ回る

の中

(八重櫻香入道の米穀)

アーヴィングの「小説家としてのホーリー」によれば、ホーリーは、本筋の米軍の歴史を書くよりも、その間の出来事や、その他の興味ある出来事を記録する方が、彼の才能をよりよく發揮できると見なす。ホーリーは、この本筋の米軍の歴史を記録するよりも、その間の出来事や、その他の興味ある出来事を記録する方が、彼の才能をよりよく発揮できると見なす。

復しゆうか、猛攻続く

七師團戰記

<214>

手足ちぎれる死体

死のゴウ

日本軍が食糧を貯蔵していたーというゴウー前田都落

敗走記

卷之三

<215>

行く先、行き先で敵襲

疲労に自決する同僚

第三回の次の手は、どういって事実をとらせなかつた。

五、神縛

あの時手りゆう弾を

（四）本邦の農業生産とその問題

卷之三

古文

あ
神
録

<218>

苦闘も水のあわ

戦死の友にすまなに

苦闘も水のあわ
戦死の友にすまない

卷之七

神經

<219>

井原作しむかで取つて来たがゆ
西田作、正三の用意をせん
北川作、大山の田代はだわいのうの御殿、萬一の事
がおはまつしたて、おだなごの下へ参れど、
無事お天子様で喜んでいたが、おおむかへて、ひき廻る

兩眼失明

北海道の味

古記

<221>

なたのじがん分。監兵の要領をじまがじまかと待つていた。

じ。空を見上げた。それから、タコツボがいたが、腰のする音を覺えた。高木

豆かんに故郷しおふ

友軍機か、青空に爆音

西、神經

<222>

丸の日の丸、思わず涙
一機だ！ たが一機
行つた。二三名
して、もたらし
薬がだ。
くわだ。これ
が友軍機だ。意が
ちがう。

山岳地帯を攻めてくる米軍＝米軍第38師団司令部提供

戰記

<223>

新編
神録

上兵は驚かず、さういふとて、三、四ぐだ。一連中風呂屋、サムライが、うしろに立つて、おどけた。おどけた。おどけた。

陣地配備

やみの中でタコツボ掘る

古文
記

卷之三

五、神緹

<224>

連合小説がぐるん風をこじ
た。最終回の死闘は、詩歌回で、
我われた。死闘に向かうにむか
ぬふねうて、
この歌がいかれたは、一矢を報す爲め、國人は我を
慕の地圖がまみれたりて、やがては軍艦を駆け出しだしたへり。
十四年夏の事、古の歌謡が變じて、小説のものも金命にて、
火薬一

故郷の家族に思にはせ

待機

ついでに、上総は中京へ一駆をもつて、
さしつかまく、上総兵は無事で、
首を擱め、やうやくいけるべしの、
時、小笠のが、上総兵の下の、
のほうからぬる木、
上総兵は中京へ一駆をもつて、
さしつかまく、上総兵は無事で、
首を擱め、やうやくいけるべしの、
時、小笠のが、上総兵の下の、
のほうからぬる木、
上総兵は中京へ一駆をもつて、
さしつかまく、上総兵は無事で、
首を擱め、やうやくいけるべしの、
時、小笠のが、上総兵の下の、
のほうからぬる木、

卷頭の講義二卷頭講義四全記録供

七師戰記

神縄

<225>

音を立てずに行動

必死でつづく負傷兵

脱 出

「わが軍、大陸は、」
「にこまね、極にして、
夜、敵の陣営から脱出する。」
「敵はそのまま、手
筋を失はせた。」
「敵は、やがて、
するものは、やがて、
が、が、が、が、が、が、
して、出発命令を得
て、」
「小笠原は去り、復
いたが、在郷等
兵は、三刀の火を押
し出す。」

「一個半隊である。中二人たらず、従つて二千人たらず、従つてといつても、敵隊が小隊にひまたない人数であつたから、敵隊は、あちこちに付いてきた。衛生兵に付きにくくやがるものは、小銃にすがつてくるやつをしたるもの、腰に刀をぶら下りて走るやつなどある。敵隊がひまつて立っているやつもある。

四方を敵いる。今、二回りつて出島の敵が古く、自決用に手をかくし、へんきをする者は、音むかす。音むかす。音むかす。

音を出さなくては、大隊本部へ三、四時頃にいた。おたりして、おまかせしたところだ。そこで、おまかせしたところだ。そこで、おまかせしたところだ。

を立
立つて、おまかせだ。おまかせだ。
おまかせだ。おまかせだ。
おまかせだ。おまかせだ。

て、さうしておれはおれの命を失ったんだ。おれが死んでしまったんだ。

（中略）

突然、矢張り飛んでしまふ。しかし、矢張り飛んでしまふ。しかし、矢張り飛んでしまふ。

「おまじねたる
なるや、無事
くわいだん

・原医だ。
その他の
だけ楽たい
樹木のあ
離地らし

「おまえの仕事は、おまえの仕事だ。」
「おまえの仕事は、おまえの仕事だ。」

「ほんとうに、おまえのやうな人間が、この世界で生き残るには、もう少し、力が必要だよ。」

燃える部屋を実現する木戸一木本漆喰専門店

驚くべき事実を表すする米兵一米軍陸軍司令部提供

卷之三

西、神經

<226>

けりうけた。農業生業者であつて、田舎の金田
あり、おなじはらあひ、田舎の金田所長は、
たゞおなじはらあひ、田舎の金田所長は、
あひ、田舎の金田所長は、

頭上で砲弾さく裂

服を干していろ最中に

裸で逃げる

七
記

西、神絆

<227>

七

卷之三

一九二九年五月

卷之三

卷之三

土砂、坑木の下敷き

予感、ぴったり当たる

ムシのしらせ

七師團
戰記

<230>

両軍の境に赤い布

米軍の戦闘方法

数種の行なわれた仲間高辻（その一）

五、神繩

「アーリー、お前が何をやるかわからぬが、おまえの仕事はおまえの仕事だ。あんなちた赤土の山へ、敵人の陣城の

犬死にはさせられぬ

陣地へ出ろとはいうが

タマが驚きになれば、必ず歌が「アヘ」。サク裏音。飛びひる姿が見えた。それを分離して落

抜群の功

敵一個中隊を撃退 小銃と手りゅう弾で

卷之三

西
神
録

<232>

お前上野民はあわてた。
どうやら来れてきたのか、わが 三番目を襲つた。草なじやま
へぬかで、腰を引くうは、ひながいた。ひとりが頭 あたらん。

ナシタナカ
ナシタナカ
ナシタナカ

二十一

卷之六

身は取ること
ができない。五十
万円、両方の運営

群書

もとしていた。
官舎上総長が小説

第一回 本居宣長

た敵兵が、サッと伏せる。警戒内の兵隊は、外部のことに気が

でしまつたのか、なんの面おも

卷之三

卷之三

<http://www.elsevier.com/locate/jalgebra>

だ だの聞こ 事で駄目ね

1966年

意外な出来事に心を奪われた。だが、それもまた、彼の心を離さないものだった。

大藏文庫

Digitized by srujanika@gmail.com

七
師
紀
國

<235>

五六粒ずつ配給

雜談し、ゆづくり味わう

戦没一万八十五柱の靈にささぐ

七
戰記

<236>

「おひどいだ。眞理子、お仕事のついでに見ておいで」
「おひどいだ。眞理子、お仕事のついでに見ておいで」
「おひどいだ。眞理子、お仕事のついでに見ておいで」

卷之二

りを包む赤い炎

四の木たまりたつ

け、いつまでも近
た。なんど、煙草
を、外側からくぐ
まわす事の用意が
時々、毛糸のよ
口のほうをのぞ
かがつた。やがて
た。煙もうす
雲はない。紅葉
一葉が、煙草紙の
縁を捲きする
（は）つて行つ

世界が注目した長江三峡(その二)

七
師
團
戰
記

<237>

五
神
縄

無気味なえい光弾

火の玉

米軍が上陸した長江渾岸(その三)

七言
歌記

<238>

共に誓った戦友 手りゅう弾に散る

手りゅう弾に散る

七
戰記

<240>

戦没一万八十五組の事ださう

やあらのを惜しらる
なきは、
のを惜しむるが故に
わざわざお出でになつた
マア

与謝野を背景にした女学生たち

西、神經

<242>

戦没一万八十五柱の歴史

日をいっぱいにうけ セミ

高地上から南のほうをのぞむ

かたわこじき

<243>

轟上に轟かれて倒れ、若大人が死んでいた。轟たる轟は、その轟が倒れたので、轟たる轟が倒れたのである。轟たる轟が倒れたのである。轟たる轟が倒れたのである。轟たる轟が倒れたのである。

服装はみだれ放題

片手にヅレやぶれた服

轟上に轟かれて倒れ、若大人が死んでいた。轟たる轟は、その轟が倒れたので、轟たる轟が倒れたのである。轟たる轟が倒れたのである。轟たる轟が倒れたのである。轟たる轟が倒れたのである。

轟上に轟かれて倒れ、若大人が死んでいた。轟たる轟は、その轟が倒れたので、轟たる轟が倒れたのである。轟たる轟が倒れたのである。轟たる轟が倒れたのである。轟たる轟が倒れたのである。

轟上に轟かれて倒れ、若大人が死んでいた。轟たる轟は、その轟が倒れたので、轟たる轟が倒れたのである。轟たる轟が倒れたのである。轟たる轟が倒れたのである。轟たる轟が倒れたのである。

轟上に轟かれて倒れ、若大人が死んでいた。轟たる轟は、その轟が倒れたので、轟たる轟が倒れたのである。轟たる轟が倒れたのである。轟たる轟が倒れたのである。轟たる轟が倒れたのである。

轟上に轟かれて倒れ、若大人が死んでいた。轟たる轟は、その轟が倒れたので、轟たる轟が倒れたのである。轟たる轟が倒れたのである。轟たる轟が倒れたのである。轟たる轟が倒れたのである。

砲声やんだ数時間
いらだたしい兵たち

降伏勸告

七師團記

西、神經

<244>

戦没一万八十五柱の靈にささぐ

西行の歌

用光緒三十一年正月
同人集於上海之大

中である。鹿児島の支那上陸は中止になつたが、他ではかかるに突然、米軍から日本軍の

北飛行機に搭乗し、職業を医大生の夫婦元氣に火を吹くこと
んな暑さにあえいでいた。

火は一瞬たかれた。友井は中止の信号もせまい。個別に免責になつた。反乱機が占領しているのはなかつた。植木上等兵の気配はなかつた。植木上等兵であられ、身動きできない。

おれでいた時だつた一歳の誕生日を記念して父の誕生日を祝う

卷之三

如是等事，皆是大乘經義，非小乘所說。

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

西神經

<245>

ゴウ内に火炎放射

父母の顔

七錄圖記

<246>

死因がわからぬ。かたあじこかの出来事。
へ、とだれかがぬだきが
耳にのじつてゐる。
敵は日本國でもあせばた
手を使用したくなるやうか
出へ

焼かれたゴウ 脱出 連隊本部の収容所へ

七
記
戰

<247>

戰没一万八十五枚の筆にさざく

米軍のいぶり出し 地面にふして防ぐ

